

登録番号 10199

演題番号 I-P1-2

新たな嚥下訓練用ゼリーは時代の寵児となるか

塩沢恵美¹ 谷口裕重¹ 福原孝子¹ 林 宏和¹ 別府 茂² 星 正弘² 井上 誠^{1,3}

¹新潟大学大学院医歯学総合研究科 摂食・嚥下リハビリテーション学分野

²ホリカフーズ株式会社

³新潟大学医歯学総合病院 摂食・嚥下機能回復部

目的：摂食・嚥下リハビリテーションを進める上で直接訓練は重要な位置を占める。その際使用される嚥下補助食品の多くは増粘多糖類を用いたゼリー状のものが多く、これらは甘く、味覚刺激の強い食品に関しては、嚥下後の唾液分泌とその誤嚥の心配という問題が残る。以上の問題を考慮し、1) これまでに市販化されていない種類の食材またはその加工品を使用し、2) 飽きが来にくく日本人の舌にあうなじみの味で、嚥下誘発を促進する可能性のある食品を試作して関連する機能（嚥下運動、唾液分泌）にどのような影響を与えるかについて検索した。

方法：被験者として摂食嚥下機能に自覚する異常を持たない健常成人 10 名（男性 9 名、女性 1 名）を選択した。実験に先立ち、日本人になじみが深く、飽きの来ない味をもつカレーと梅を選択し、ホリカフーズ株式会社と共同して梅ゼリー、カレーゼリー、無味無臭のコントロールゼリーを作製した。被験者は端座位にて閉眼し、術者がティースプーンにて差し出した一口大のゼリーを口腔内に含んだ後、術者の合図をもとにこれを一口で飲み込んだ。それぞれのゼリーを一口摂取した場合、五口摂取した場合に分けて記録し、嚥下関連筋電図（右側咬筋、舌骨上筋、舌骨下筋、口輪筋）と嚥下後の唾液分泌量を記録した。

結果と考察：梅ゼリー摂取後の唾液分泌量は他のゼリーに比べて有意に増加した。各筋活動を比較したところ、いずれの筋にも嚥下時特有の活動パターンがみられたが、咬筋や口輪筋などの随意性の高い筋ではコントロールゼリーに比べて梅ゼリーやカレーゼリーで大きな値を示した。さらに繰り返し嚥下時の筋活動の安定性はカレーゼリーにおいて高かった。今後は高齢者や有病者での記録と評価を行いながら改良を加えて、安全でおいしい介護・訓練用食品として提供できることを目指したい。